

幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因

就労形態からの検討

鶴川女子短期大学 小坂 千秋

The sources of parenting satisfaction in mothers of infants: A Study of Career Patterns

Tsurukawa Woman's Junior College KOSAKA, Chiaki

幼児を持つ母親の子育てへの肯定的な感情である親役割満足感について、就労形態別に比較検討した。加えて重回帰分析により、親役割満足感を規定する要因の分析も行った。その結果、親役割満足感には夫の子育て満足、親としての態度満足、子どもとの関係満足の3次元が見出され、特に親としての態度満足感が得にくいことが見出された。さらに重回帰分析の結果から、親役割満足感には子どもの発達に関する懸念、職業満足感、情緒的サポートの影響がみられ、道具的サポートの直接的な影響は見出されなかった。就労形態別に分析した結果から、特にフルタイムで働く母親については、親としての態度や子どもとの関係の満足感への情緒的サポートの強い影響が示され、情緒的サポートの重要性が示された。

【キー・ワード】 母親，親役割満足感，就労形態，ソーシャル・サポート

The purpose of this investigation was to examine the parenting satisfaction – defined as positive feelings about child rearing – in mothers of infants. In addition, the factors affecting parenting satisfaction was examined by multiple regression analysis. This parenting satisfaction scale was comprised of three domains: satisfaction with the spouse parenting performance, satisfaction with the parent's own performance, and satisfaction with the parent-child relationship. A multiple regression analysis of this data suggested that emotional support, anxiety of child development, and career satisfaction affected parenting satisfaction. Instrumental support did not affected parenting satisfaction. Especially for mothers with a full-time job, emotional support significantly affected satisfaction with the parent's own performance and the parent-child relationship.

【Key Words】 Mother, Parenting satisfaction, Career pattern, Social support

問題と目的

近年、女性の社会進出や少子化、ライフスタイルの変化などにより、子育てへの意識・感情にも変化がみられるようになった。子どもを持たないままでいようと考えている者が増え(青木・神宮 2000)、若年世代ほど子どもの価値は絶対的なものではなく、自分自身の成長や経験の上で価値があるという相対的なものとなってきている(柏木・永久 1999)。また世代が若くなるにつれ、子育てを否定的に捉える傾向もみられている(大日向 1988)。このようなことから若年世代の親ほど育児の意義に対する評価が低い、あるいは子育てを否定的に見る傾向が増していると考えられる。

そのような流れの中で親としての意識・感情を理解するために重要視されてきたものが、育児不安や育児ストレスのような育児への否定的な側面についての研究である。近年、幼児を持つ母親の悩みや不安が表面化し、これらの研究がさまざまな分野で進んでいる。育児不安やストレスを抱えてしまうことによって、親役割に積極的にかかわれずに、育児放棄や家事放棄に至ってしまうケースもあり、育児不安や育児ストレスに影響を及ぼす要因及び対応策を明らかにすることが、育児支援の現場からも求められ、さかんに研究されてきた。

このように国内における子育てへの意識・感情の研究は、否定的な側面が注目されることが多かった。他方、親であることから得られる喜びや満足感のような肯定的な感情についても、注目されつつある。子育ては喜びや満足感を伴うものであり、ほとんどの親がそのような感情をもって子育てをしている(佐藤ら 1994, 首藤・馬場 1995)。また「子どもを持って成長できた」という感情は、父親母親がともに抱く思いでもある(柏木・若松 1994)。このように親としての役割の中には、子どもを育てることによる辛さもあるが、子育てによって得られる肯定的な感情も存在するのである。

この親役割に対する肯定的な感情であるが、海外においては1980年代初め頃から注目されはじめ、親役割から得られる喜びや親役割に対する満足感など、親役割に対する肯定的な感情について探索的に検討した研究が行われた。その後、この親役割に対する肯定的な感情を測定できるものとして、親役割満足感の研究が行われるようになった。この親役割満足感については、研究者によって定義や尺度がそれぞれ異なっており、「親役割に関する様々な領域からなる満足感を測定するもの」(Guidubaldi & Cleminshaw 1985)、「親としての責任に関する満足感や充足感を反映するもの」(Mouton & Tuma 1988)などがある。このように親役割満足感とは、親役割の意識や行動についての満足感をあらわすものであると考えられる。なお、親役割とは「親の意識や行動面を含む親としての役割つまり一人の人間を生み、養い、社会的に一人前になるまで育てる仕事を総括したもの」であるため(野澤 1989)、本研究における親役割とは、この概念を用いる。また、満足感とは、「喜びや肯定的感情を持っている状態のこと」である(本明 1989, 田中 1997)。したがって本研究における親役割満足感の定義は、これらの定義から、「親としての役割つまり一人の人間を生み、養い、社会的に一人前になるまで育てる仕事によりもたらされる、喜ばしいもしくは肯定的な感情をもっている状態」とする。本研究では、この親役割満足感の国内における構造を明らかにすることを第1の目的とする。

次に、この親役割満足感に影響を及ぼす変数を検討することを第2の目的とする。これまで親役割

満足感は身体的・精神的健康 (Koeske & Koeske 1992, Mouton & Tuma 1988), 親役割の受容 (Russell 1974), そして良好な養育態度 (Simons et al. 1993) に影響を及ぼすことが明らかにされている。また親役割満足感を規定する要因についても、いくつか検討されてきた。親役割満足感を規定する要因として、まずソーシャル・サポートなど母親の生活関連の変数がある。Koeske & Koeske (1992) は親役割満足感、子どもの行動や発達ストレスの統制、ソーシャル・サポート、自己評価、心的・身体的症状との関係をパス解析によって検討し、因果関係モデルを検証している。その結果、親役割満足感にはソーシャル・サポートの影響を受けるというモデルが明らかにされた。ソーシャル・サポートは、国内の乳児を持つ母親を対象とした研究においても、その影響力が見出されている (大藪・前田 1994)。その他の母親関連の変数としては、母親としての自分の理想と現実の差が小さいことも、親役割満足感に影響していることが明らかにされている (Ohashi 1992)。

親役割満足感を規定する子ども関連の要因についても検討されている。子どもの行動や発達など、子ども関連ストレスを統制できるかどうかは親役割満足感に影響を及ぼすことが明らかにされている (Koeske & Koeske 1992)。また子どもの行動に問題を抱えている母親と問題を抱えていない母親の親役割満足感を検討した研究 (Mouton & Tuma 1988) や、特別な病気を持つ子どもの親と健常児の親の親役割満足感を比較した研究 (Rodrigue et al. 1994) が行われ、子どもの行動や発達に懸念を抱いている群において、親役割満足感が低下することが示されている。つまり子どもの行動や発達に問題があること、あるいは、問題があると認知することが親役割満足感を低下させる要因になっていると考えられる。

これらの先行研究より、親役割満足感を規定する要因として、ソーシャル・サポートや子どもの発達に関する懸念が考えられる。しかし、このようなモデルは海外のモデルであり、日本の母親を対象には検討されていない。したがって本研究では、親役割満足感に影響を及ぼす変数としてソーシャル・サポートや子どもの発達に関する懸念を取り上げ、それぞれの変数が親役割的満足感に及ぼす影響を検討することを第2の目的とする。

最後に親役割満足感とは社会経済的屬性との関連も検討されているが、一貫した結果が得られているものは就労形態についてである。就労形態については、働いている母親と無職の母親の親役割満足感を比較すると、働いている母親の親役割満足感が高いことが指摘されており (Gottfried & Gottfried 1988), その違いについては、専業主婦における自己評価や自己効力感の低さ、孤独やあまり子育てに魅力を感じていないのにならなくてはならないという感情のためかもしれないと考察されている (Beyer 1995)。これまで国内で行われてきた育児不安の研究においても、専業主婦の母親に育児不安が高いことが指摘されており、育児感情と就労形態が密接に関連している様子がうかがえる (長津・真下 1998)。したがって本研究では、親役割満足感を就労形態別に検討し、その差異を明確にすることを第3の目的とする。

方法

1. 調査対象 東京都内及び千葉県内の幼稚園及び保育所 8 園に在園する 3~5 歳クラスの母親を調

査対象とした。なお、本研究において3~5歳児を持つ母親に焦点を当てた理由は、先行研究よりこの年齢の子どもを持つ母親に、育児や子どもへの感情的葛藤が強いことが指摘されていたためである。調査用紙は園児を通して配布し、後日園児を通して回収した。配付数は931名で、回収数は480名、有効回答数は455名(有効回答率48.8%)である。調査は2000年10月から11月に行われた。分析対象者の属性は表1の通りである。

表1 分析対象者の属性

平均年齢(歳)	34.5	(SD 4.26)
母親の学歴		
中学卒	15	(3.3)
高校卒	208	(45.7)
短大卒	149	(32.7)
大学・大学院卒	78	(17.1)
不明	5	(1.1)
母親の就労状況		
フルタイム	59	(13.0)
パートタイム	69	(15.2)
専業主婦	278	(61.1)
不明	49	(10.8)
対象児の学年		
年少	148	(32.5)
年中	156	(34.1)
年長	151	(33.4)
家族構成		
夫と子どものみ	363	(79.8)
夫、子ども、夫の親または自分の親と同居	65	(14.3)
その他	27	(5.9)

()内は%

2. 調査内容

(1) 親役割満足感尺度(CGPSS) 近年、育児期の母親の子育てに対する否定的な感情が注目されているが、子育てには否定的な側面ばかりではなく肯定的な側面もある。本研究では、これまで国内ではほとんど扱われてこなかった子育てへの肯定的な感情を多面的に検討することを目的とする。育児期の子育てへの肯定的な感情を測定するために、本研究ではCleminshaw & Guidubaldi Parent Satisfaction Scale (以下 CGPSS)を使用した。この尺度は、「配偶者の子育て満足度」「子どもとの関係の満足度」「親としての態度満足度」の3次元から成り、親としての肯定的な感情を多面的に測定するために有効な尺度であると考え、採用した。この親役割満足感尺度の内容的妥当性を検証

するため、幼児を持つ母親 6 名に翻訳した CGPSS(1985)50 項目を回答してもらい、自分の子どもに対する感情の項目として該当しない項目を挙げてもらった。6 名全員があてはまらないと回答した項目がなかったため、親役割満足感尺度については CGPSS(1985)50 項目を翻訳したものをそのまま使用することとした。回答方法は、「全くそう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」までの 5 件法であり、満足度が高いほど高得点を与えるよう得点化してある。

(2) ソーシャル・サポート尺度 海外の先行研究より、親役割満足感を規定する要因としてソーシャル・サポート重要性が指摘されていたため、本研究においても変数に加えることとした。ソーシャル・サポートに関する定義はいくつも存在しているが、南(1986)が指摘するように、少なくとも人が他者から情緒的および手段的な助力を得ていると認知するものであるという点に関しては、研究者の同意が得られているようである。したがって本研究においては、情緒的サポートと道具的サポートの 2 つの概念を用いる。またサポートの供給源としては、夫と夫以外の人々(親戚、近隣、地域社会の人々)が想定されるが、本研究においては、親役割満足感尺度に夫の子育てについての満足度が含まれており、これは夫からのサポートについて間接的に測定しているものと考えられる。したがって、本研究におけるソーシャル・サポートとは夫以外の人々からの情緒的・道具的サポートに範囲を限定するものとする。夫以外の人々からのサポートを測定する尺度については、田中(1997)の「情緒的サポート」「道具的サポート」からなる尺度を使用した。6 項目からなる尺度であり、サポートの数を「全くない(1点)」から「たくさんいる(4点)」までの 4 件法で回答するものである。サポートが多いほど、高得点を与えるよう得点化してある。

(3) 子どもの発達に関する懸念項目について 先行研究より子どもの発達に関する心配の程度が親役割満足感に影響を及ぼしている可能性が考えられたため、子どもの発達に関する懸念を変数として加えることとした。子どもの発達に関する懸念の測定方法であるが、この方法は子どもの発達をどのくらい心配に思っているかを質問している。子どもの発達に関する領域を東ら(1981)と予備調査を参考に 8 領域作成し、それぞれの領域に関する心配の程度を質問した。領域については、「礼儀作法」「従順さ」「学習関係」「情緒的成熟」「社会性」「自立」「自己主張」「身体」の 8 領域である。回答方法は「全く心配ではない(1点)」から「とても心配である(5点)」までの 5 件法であり、心配が大きいほど高得点を与えるよう得点化してある。

(4) 職業満足度 親役割満足感が就労形態と関連していることが考えられたが、その仕事に満足し、納得して行っているかどうかについても、親役割満足感に影響する可能性が考えられる。したがって現在の職業に対する満足度についても質問することとした。これは専業主婦には専業主婦としての満足度を、就労している者にはその仕事の満足度を「不満である(1点)」から「満足している(5点)」までの 5 件法で回答するものである。

(5) 社会経済的属性 母親自身の年齢、学歴、就労形態、子どもの人数と年齢、家族形態を質問した。

結果と考察

1. 親役割満足感について

(1) 親役割満足感の構造

親役割満足感 50 項目への回答に対して主因子法による因子分析を行い、スクリープロットと因子の解釈可能性を考慮して 3 因子を抽出した。因子間に相関がないことが予想されたため、因子軸の回転には直交回転（バリマックス法）を用いた。次に項目を精選するため、それぞれの因子において負荷量が .40 以下の項目 15 項目を削除し、残った項目について因子分析から項目削除まで一連の作業をもう一度繰り返した。さらに負荷量の低かった 3 項目を削除し、残った 32 項目について因子分析から項目削除まで一連の作業を再度繰り返したところ、表 2 に示すような結果を得た。

第 1 因子は、「夫の子育てへのかかわりに満足」「夫の子育て能力に満足」といった項目に負荷が高く、夫の子育てへのかかわりや責任、行動などを表す項目から成るため、＜夫の子育てへのかかわり満足＞と命名した。

第 2 因子は、「自分のしつけ方に反省することが多い」「子どもに大声で叱ることがあるのでいやだ」など子どもに対する行動、感情などをあらわす項目から成るため、＜親としての態度満足＞と命名した。

第 3 因子は、「子どもがいつも私を幸せにしてくれる」「子どもとの関係は好ましいもの」など子どもから受ける喜び、子どもとの関係などを表す項目から成るため、＜子どもとの関係満足＞と命名した。

これら 3 因子の累積寄与率は、全分散の 42.17%であった。アルファ係数は、第 1 因子が .94、第 2 因子が .80、第 3 因子が .75 であり、尺度の信頼性は十分高いといえよう。

親役割満足感尺度の得点方法は、各項目の粗点（1～5 点）の合計を項目数で割った得点を各因子の得点とした。各因子の平均値と標準偏差を表 3 に示す。各因子の平均値は＜子どもとの関係満足＞が最も高く平均で 4.05 点であり、一般的に子どもとの関係は良好と認知されているようである。次いで＜夫の子育てへのかかわり満足＞が高くなっているが、標準偏差が最も大きく、夫の子育てへのかかわりに満足しているかどうかには差が大きいといえよう。最も平均値が低かった因子は＜親としての態度満足＞である。この因子に含まれる項目のほとんどが逆転項目であったため、得点が低くなった可能性も考えられるが、この得点から育児期の母親が、特に親としての態度に満足できにくいことが考えられる。

表2 「親役割満足感」項目の因子分析結果

< 第 因子：夫の子育てへのかかわり満足 >			
夫の子どもに対するかかわりには満足している	.860	.025	.037
夫の子育て能力に対して満足している	.835	-.038	.071
夫の子どもに対する関心度には満足している	.818	-.017	.095
夫は子育てに十分に責任を感じている	.782	-.006	.081
夫に親としての役割をもっと果たしてほしい	.739	.196	.033
私は夫が子どもとの間に築いている関係を好ましいと思っている	.733	-.079	.197
夫は子どもの世話を十分にしていない場合が多い	.732	.033	-.017
夫は子どもの成長についてよく理解しているため、親として安心感をもっているようである	.721	.060	.243
夫はどんなに忙しくても、また大人には無関係な場合であっても、常に子どもの問題に耳を傾けている	.719	.042	.201
夫がもっと積極的に子どもとの行動を共にしてくれるといいと思う	.719	.128	.023
夫が子どもに対して費やしている時間の長さに満足である	.650	.043	.063
私は夫の子どもに対するしつけ方に好感をもっていない	.646	.068	.088
夫の子育てについて、もっと一貫性のあるやり方をしてほしいと思う	.602	.100	-.015
夫は親であることが人生において重要であり、価値があると思っている	.509	-.109	.369
夫は子どもに叱ることしかしないので、私は不快に思っている	.480	.027	.066
夫は頻繁に家庭内のルールを変えるので、私や子どもは混乱する	.419	.102	.078
< 第 因子：親としての態度満足 >			
私は子どもに対して大声で叱ることがあるのでいやだ	.096	.723	.060
私は子どもに対して、すぐかっとならなければいいのにと思う	-.005	.713	-.003
私は自分のしつけ方に対して、後で反省する場合が多い	-.044	.707	.031
私は時々、子どもに批判的すぎると思うことがある	.081	.588	.119
私は自分の子育てのやり方に満足している	.177	.500	.393
私は子どもに十分な愛情表現をしていない	.059	.488	.283
私は親としてもっと一貫性のある行動をとりたいと思う	.032	.423	-.081
< 第 因子：子どもとの関係満足 >			
私は子どもがいつも私の幸せに貢献していると思う	.129	.075	.620
子どもの存在は大きな影響力をもち、私の人生を意義ある豊かなものにしてくれる	.052	-.002	.576
全体として私は親であることが幸福であるとは思っていない	.063	.185	.536
私は自分と子どもとの関係を好ましいものであると考えている	.088	.343	.477
親が自分の子どものために費やす努力は、長い目でみて価値あるものである	.028	-.073	.470
子どもと一緒に行動することはたいてい喜びであり、楽しみである	.124	.137	.464
子どもをもつことは、いつも若い気分であることができるのでうれしい	.045	.112	.424
子どもが私を手伝ってくれることは大いにうれしい	.035	-.008	.420
私は老年期において、子どもの存在によって、精神的に安定して、安心して過ごせると思う	.059	-.050	.414
寄与率	26.230	9.850	6.080
累積寄与率	26.230	36.090	42.170
係数	.937	.799	.747
は逆転項目			

表3 「親役割満足感」各因子の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
夫の子育てへのかかわり満足	3.54	0.82
親としての態度満足	2.72	0.71
子どもとの関係満足	4.05	0.50

(注) 評定範囲はすべて1~5である。

(2) 「親役割満足感」尺度と就労形態との関連

子育てへの否定的な感情は、就労形態と関連していることが先行研究より指摘されており、専業主婦と仕事を持つ母親では、子育てへの感情は差異がみられている。子育てへの肯定的な感情である親役割満足感についても、就労形態により関連があることが予想されるため、親役割満足感と就労形態との関連を検討する。就労形態はフルタイム群(N=59)、パートタイム群(N=69)、専業主婦群(N=278)の3群を分析対象とした。それぞれの群の特徴(平均年齢と学歴)を表4に示す。

表4 就労形態別の平均年齢と学歴構成

	フルタイム(N=59)	パートタイム(N=69)	専業主婦(N=278)
<平均年齢(SD)>	35.3(4.95)	33.6(4.78)	34.6(3.91)
<学歴>			
中学・高校卒	26(44.1%)	44(63.8%)	130(46.8%)
短大卒	17(28.8%)	18(26.1%)	99(35.6%)
大学・大学院卒	14(23.7%)	4(5.8%)	49(17.6%)
不明	2(3.4%)	3(4.3%)	0(0%)

就労形態を独立変数とし、親役割満足感の各因子を従属変数とする分散分析及びTukey法による多重比較を行った。その結果、<夫の子育てへのかかわり満足>に有意な差がみられ($F(2, 403) = 10.69$, $p < .001$)、<親としての態度満足>に有意な傾向がみられた($F(2, 403) = 2.91$, $p < .10$) (表5)。本研究においては、夫の育児へのかかわりがどの程度であったかについては調査されていないが、柏木ら(2003)などの先行研究から、夫の育児時間は妻がフルタイム、パートタイム、専業主婦の順に減少することが指摘されている。この傾向から、専業主婦の母親は、夫の育児時間が少なくとも自分が子育てに専念できるために夫の子育てにあまり不満を抱かず、他方、パートタイムの母親は、仕事量が増加するにもかかわらず、夫の育児へのかかわりが極端に増えるということもないため、夫の育児に対する満足感が低くなってしまわないだろうか。また親としての態度満足については有意な傾向がみられ、多重比較の結果は明確な差異がみられていないが、平均値で検討すると専業主婦の得点が低くなっている。このことは専業主婦において親としての態度満足度が低くなりやすい傾向を示しており、専業主婦が特に親としての態度に満足できにくい傾向がうかがえる。

表5 就労形態における親役割満足感得点と分散分析結果 (F値)

		平均値 (SD)	F値	多重比較
夫の子育て へのかかわ り満足	フルタイム (n=59)	3.46 (.86)	10.69 ***	パートタイム < 専業主婦 ***
	パートタイム (n=69)	3.16 (.82)		
	専業主婦 (n=278)	3.65 (.79)		
親としての 態度満足	フルタイム (n=59)	2.80 (.78)	2.91 †	
	パートタイム (n=69)	2.81 (.66)		
	専業主婦 (n=278)	2.62 (.71)		
子どもとの 関係満足	フルタイム (n=59)	4.04 (.57)	0.6	
	パートタイム (n=69)	4.06 (.53)		
	専業主婦 (n=278)	4.04 (.48)		

† p<.10 ***p<.001

2. ソーシャル・サポートについて

(1) ソーシャル・サポートの構造

ソーシャル・サポート 6 項目への回答に対して主因子法による因子分析を行い、スクリープロットと因子の解釈可能性を考慮して 2 因子を抽出した。因子軸の回転には直交回転 (バリマックス法) を用いた。その結果、表 6 に示すような結果を得た。第 1 因子は「心配事などに親身に助言してくれる人」や「育児について気軽に相談できる人」といった項目から成っており、<情緒的サポート>と命名した。第 2 因子は「病気になったとき育児や家事などをしてくれる人」や、「仕事や緊急時に子どもを預けることができる人」といった項目から成っており、<道具的サポート>と命名した。アルファ係数は、第 1 因子は .83、第 2 因子は .80 であり、尺度の信頼性は十分高いといえよう。また第 1 因子と第 2 因子の間には中程度の正の相関がみられていた ($r = .484, p < .001$)。

表6 「ソーシャル・サポート」項目の因子分析結果

< 第 1 因子：情緒的サポート >		
心配事や不安があるときに相談したり、親身に助言してくれる人	.853	.129
育児について、困ったことやわからないことがあるとき、気軽に相談できる人	.768	.223
落ち込んだり、イライラしたときに、いっしょにストレスを発散する人	.678	.320
< 第 2 因子：道具的サポート >		
あなたが病気になったとき、育児や家事などをしてくれる人	.221	.810
2～3日の間家を空けるようなときに、家のめんどうを頼める人	.135	.801
仕事のあるときや、緊急時に子どもを預けることができる人	.396	.553
寄与率	33.36	29.53
累積寄与率	33.36	62.89
係数	.831	.800

(2) 「ソーシャル・サポート」尺度と就労形態との関連

就労形態を独立変数とし、ソーシャル・サポートの各因子を従属変数とする分散分析及び Tukey 法による多重比較を行った(表 7)。その結果、<情緒的サポート>に有意な傾向がみられた($F(2, 403) = 2.54, p < .10$)。下位検定の結果からは、フルタイムの母親がパートタイムの母親より情緒的サポートが少ない傾向がみられていた。フルタイムで働く母親は、パートタイムで働く母親と比較して、周囲に共感されにくい環境が背景にあるのではないだろうか。したがって育児や自分自身のことなどを相談できる人がパートタイムの母親より少ない結果となったことが考えられる。

表7 就労形態におけるソーシャル・サポート得点と分散分析結果 (F値)

		平均値 (SD)	F値	多重比較
情緒的 サポート	フルタイム (n=59)	2.73 (.70)	2.54 †	フルタイム < パートタイム †
	パートタイム (n=69)	2.98 (.60)		
	専業主婦 (n=278)	2.84 (.62)		
道具的 サポート	フルタイム (n=59)	2.16 (.65)	1.16	
	パートタイム (n=69)	2.28 (.67)		
	専業主婦 (n=278)	2.29 (.59)		

† $p < .10$

3. 「子どもの発達に関する懸念」について

子どもの発達に関する懸念については、8領域についてどのくらい心配であるかという回答を得点化し(5件法)、その合計を項目数で割り、子どもの発達に関する懸念得点とした。子どもの発達に関する懸念の平均値(及び標準偏差)は2.63(0.73)であった。子どもの発達に関する懸念について就労形態との差異を検討するため、就労形態を独立変数とし、子どもの発達に関する懸念を従属変数とする分散分析を行った。その結果、有意な差はみられず($F(2, 398) = .282, p > .10$)、就労形態によって子どもの発達懸念には差はみられないことが示された。

4. 「職業満足感」について

職業満足感についての平均値(及び標準偏差)は3.83(0.99)であった。職業満足感は5点満点であるため、満足感は比較的高い傾向がみられている。就労形態を独立変数とし、就労満足感を従属変数とする分散分析を行った結果、有意な差はみられず($F(2, 398) = 1.321, p > .10$)、就労形態によって職業満足感に差はみられないことが示された。

5. 親役割満足感を規定する要因の検討

母親の親役割満足感を規定する要因を検証するため、親役割満足感を従属変数とする重回帰分析を行った。独立変数は情緒的サポート、道具的サポート、子どもの発達に関する懸念そして職業満足感である。重回帰分析はステップ・ワイズ法で行った。

その結果、親役割満足感の3つの領域において、子どもの発達に関する懸念からの負の影響が、そ

して職業満足感からの正の影響が見出された(表8)。このことは、子どもの発達についての心配や職業満足感が、夫の子育てや親としての態度、子どもとの関係満足に影響を及ぼすことを表している。またソーシャル・サポートのうち、情緒的サポートについては<親としての態度満足>と<子どもとの関係満足>への有意な正の影響が見出されており、周囲に子育てやさまざまなことについて気軽に相談できる関係をもつことが、親としての態度満足感や子どもとの関係満足感を高める方向に作用することが示された。情緒的サポートは有意な影響が見出されたが、他方、道具的サポートは有意な影響が見出せなかった。このことから、育児を物理的にサポートすることだけでは親役割満足感に影響を及ぼさないことが明らかにされた。

表8 親役割満足感の各因子を従属変数とした重回帰分析の結果

	夫の子育て (N=338)	親としての態度 (N=338)	子どもとの関係 (N=338)
子どもの発達に関する懸念	-.22***	-.27***	-.24***
職業満足感	.26***	.10 [†]	.17**
情緒的サポート	-	.19***	.23***
道具的サポート	-	-	-
F	25.72***	18.82***	24.58***
自由度調整済みR ²	.13	.13	.17

† p < .10, ** p < .01, *** p < .001

これまで親役割満足感に影響を及ぼす要因を検討してきたが、次に就労形態による差異を検討する。就労形態別に重回帰分析を行った結果、親役割満足感に及ぼす影響は、就労形態により差異がみられていることが明らかにされた(表9)。まず<夫の子育てへのかかわり満足>については、表8において「職業満足感」への正の影響が見出されていたが、就労形態別に検討すると、この影響は専業主婦のみにみられる影響であることが示された。つまり専業主婦においては、就労していない状態に満足し納得している場合に夫の子育てへのかかわり満足感が高まるが、専業主婦である状態に納得していない場合には、夫の子育てへのかかわり満足感は低くなるということを示している。この背景には、夫がもっと子育てにかかわってくれていたら就労や主婦以外の活動が可能になるかもしれないが、それができないという不満が表れているのかもしれない。またパートタイムの母親においては、「情緒的サポート」が夫の子育て満足感に正の影響を示していることも興味深い。幼い子どもを持ちながらパートタイムで働いているという状況を理解し、精神的にサポートしてくれる人がいることによって、夫の子育てへのかかわりに対する不満をあまり感じなくなるのではないだろうか。また、フルタイムの母親については、このモデルはあてはまらなかった。

次に<親としての態度満足>について検討する。フルタイムの母親については、情緒的サポートからの正の影響が示されていた。情緒的サポートを就労形態別に検討した結果からは、フルタイムの母親は情緒的サポートを得にくいという結果が示されていたが、幼い子どもを持ちながらフルタイムで働いているということについて理解を示し、子育てやさまざまなことについて精神的に支えてくれる人がいるということが、親としての態度満足感を高める方向に働くのである。フルタイムの母親にと

っては特に情緒的サポートの重要性が示された結果といえよう。またどのような就労形態であっても、「子どもの発達に関する懸念」が親としての態度満足感に負の影響を及ぼすことが示された。

最後に<子どもとの関係満足>について検討する。フルタイムの母親については、子どもの発達に関する懸念と情緒的サポートが影響しており、子どもの発達懸念は負の影響力が、情緒的サポートは正の影響力が見出された。パートタイムの母親については、職業満足感の正の影響が見出され、その仕事に納得し、満足しているかどうか子どもとの関係にも影響していることが示された。この影響は専業主婦においてもみられており、専業主婦に満足している場合、子どもとの関係も良好なものと認知する一方で、不満を感じている場合には子どもとの関係も良くないと認知される傾向が示された。

表9 親役割満足感の各因子を従属変数とした就労形態別の重回帰分析の結果

	夫の子育て			親としての態度			子どもとの関係		
	フルタイム (N=68)	パートタイム (N=161)	専業主婦 (N=161)	フルタイム (N=58)	パートタイム (N=68)	専業主婦 (N=161)	フルタイム (N=58)	パートタイム (N=68)	専業主婦 (N=161)
子どもの発達に関する懸念	-	.25*	-.26***	-.29*	-.31*	-.33**	-.40**	-	-.26**
職業満足感	-	-	.31**	-	-	-	-	.37**	.27***
情緒的サポート	-	.30*	-	.39**	-	.20**	.37**	-	-
道具的サポート	-	-	.16*	-	-	-	-	-	-
F	-	6.34*	19.45***	12.10***	6.88*	15.66***	17.16**	10.65*	16.70***
自由度調整済みR ²	-	.14	.22	.28	.08	.15	.36	.12	.16

* p < .05, ** p < .01, ***p < .001

全体的考察と今後の課題

本研究は、幼児を持つ母親の親役割満足感に注目し、その構造と親役割満足感を規定する要因について検討した。またそれらの就労形態による検討も行い、就労形態別に分けてその特徴を明らかにした。これらの分析の結果から、主に以下の3点が明らかにされた。

1. 親役割満足感について

本研究から得られた第1の成果は、親役割満足感の構造において<夫の子育てへのかわり満足>、<親としての態度満足>、<子どもとの関係満足>の3次元が見出されたことである。本研究の特徴として、親役割満足感の次元の中には母親に関するものだけでなく、父親の育児へのかわりをどう評価しているかという次元も含まれている。親役割満足感には母親だけのものではなく、父親(夫)のかわり方によっても変化するものであろう。したがって親役割満足感の中には、母親自身の子どもへの態度、子どもとの関係、そして夫がどのように子育てにかかわっているかについての評価が含まれている。それらの次元の特徴として、特に親としての態度満足感の得点が全体的に低いことが注目される。幼児を持つ母親は、全体として親としての態度を低く評価しており、さらにこの傾向は、

働いている母親よりも専業主婦にみられていた。これまで、専業主婦は育児不安や育児ストレスを感じやすいことが指摘され、その背景として、専業主婦は社会から孤立しやすく、自己評価も低いことが指摘されてきた。本研究の結果についてもこのような専業主婦の閉塞感が影響し、親として好ましくない態度を取りやすいと認知されたのかもしれない。

2. 親役割満足感を規定する要因について

第2の成果は、親役割満足感を規定する要因について明らかにされたことである。親役割満足感に影響を及ぼす変数については数多くの変数が考えられるが、本研究ではソーシャル・サポートの情緒的サポートと道具的サポート、子どもの発達に関する懸念そして職業満足感について検討した。その結果、子ども発達に関する懸念と職業満足感は、親役割満足感の全ての次元に影響を及ぼす要因であることが明らかにされた。さらにソーシャル・サポートについては、情緒的サポートが親としての態度や子どもとの関係満足感に影響を及ぼすことが明らかにされ、特に情緒的サポートの重要性が示された。他方、道具的サポートは親役割満足感のどの次元にも影響を及ぼしておらず、実際に子どもを預かってもらうことや、家事を手伝ってもらうサポートだけでは親役割満足感には影響を及ぼさないことが明らかにされた。

3. 就労形態別の特徴について

第3の成果は、親役割満足感を規定する要因は就労形態ごとに異なることが明らかにされたことである。母親全体の分析において、職業満足感が夫の子育てへのかかわりに影響していたが、これは専業主婦においてみられる特徴であることが明らかにされ、専業主婦であることに納得しているかどうか、夫の子育てへの評価に影響してくることが示唆された。またフルタイムの母親に関しては、親としての態度満足感と子どもとの関係満足感において情緒的サポートの影響がみられていた。親としての態度満足感に及ぼす影響力は子どもの発達に関する懸念よりも強く、フルタイムで働く母親の親役割満足感には、情緒的サポートが特に必要であることが示唆された。フルタイムで働く母親は、そのライフスタイルが伝統的な価値観に反するため、周囲の理解を得にくいことも多いだろう。フルタイムで働く母親は、パートタイムで働く母親よりも情緒的サポートが低い傾向がみられたという結果は、このことを示しているのではないだろうか。親としての態度に満足するためには、周囲の人にフルタイムで働く状況を理解してもらい、育児だけではなく、生活のさまざまなことについて相談する、あるいはアドバイスをうけることができるという関係を築いていることが重要である。このようなサポートがフルタイムの母親には重要であることが明らかにされたことは、意義深いといえよう。

4. 今後の検討課題

最後に今後の検討課題を述べる。本研究では、親役割満足感の測定に米国の尺度を利用したため、日米に共通する項目から成る親役割満足感とは検討されたが、日本の母親独自の親役割満足感を反映することができなかった。子育てに対して日本の母親には米国の母親にはない独自の価値観や感情もあるものであり、今後はさらに日本の母親独自の項目も追加して検討する必要があると考える。さらに、子育てはさまざまな感情が伴うものであり、この親役割満足感とは他の子育て感情（育児不安や育児ストレスなど）とどのような関係にあり、それらが実際の子育てにどのように影響しているのかについても検討するなど、親役割満足感の研究をさらに進めてゆきたい。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・R. D.ヘス. (1981). *母親の態度・行動と子どもの知的発達: 日米比較研究*. 東京: 東京大学出版会.
- 青木紀久代・神宮英夫(編). (2000). *子どもを持たないところ*. 京都: 北大路書房.
- Beyer, S. (1995). Maternal employment and children's academic achievement: Parenting style as mediating variable. *Developmental Review*, **15**, 212-253.
- Gottfried, A. E., & Gottfried, A. W. (1988). Maternal employment and children's development: an integration of longitudinal findings with implications for social policy. In A. E. Gottfried, & A. W. Gottfried (Eds.), *Maternal employment and children's development* (pp.269-287). New York, Plenum Press.
- Guidubaldi, J., & Cleminshaw, H. K. (1985). The development of the Cleminshaw-Guidubaldi Parent Satisfaction Scale. *Journal of Clinical Child Psychology*, **14**(4), 293-298.
- 本明 寛 (監). (1989). 職務満足. *評価・診断 心理学辞典* (pp.173-174). 東京: 実務教育出版.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, **5**(1), 72-83.
- 柏木恵子・永久ひさ子. (1999). 女性における子どもの価値: 今, なぜ子を産むか. *教育心理学研究*, **47**(2), 170-179.
- 柏木恵子・平山順子・目良秋子・小坂千秋・平賀圭子・飯島絵理. (2003). 育児期女性の就労中断に関する研究. *With Youさいたま 平成14年共同研究報告書*.
- Koeske, G. F., & Koeske, R. D. (1992). Parenting locus of control: Measurement, construct validation, and a proposed conceptual model. *Social Work Research and Abstracts*, **28**(3), 37-46.
- Russell, C. S. (1974). Transition to parenthood: Problems and gratifications. *Journal of Marriage and the Family*, **36**, 294-302.
- 南 裕子. (1986). ソーシャル・サポート・ネットワーク: 理論と研究方法の概観. *日本保健医療行動学会年報*, **1**, 88-108.
- Mouton, P. Y., & Tuma, J. M. (1988). Stress, locus of control, and role satisfaction in clinic and control mothers. *Journal of Clinical Child Psychology*, **17**(3), 217-224.
- 長津美代子・真下由佳. (1998). 夫婦の役割葛藤と育児不安: 乳幼児の母親を対象とした調査から. *群馬大学教育学部紀要: 芸術・技術・体育・生活科学編*, **33**, 251-260.
- 野澤 みつえ. (1989). 親業ストレスに関する基礎的研究. *教育学科研究年報*, **15**, 35-56.
- Ohashi, J. P. (1992). Maternal role satisfaction: A new approach to assessing parenting. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal*, **6**(2), 135-154.
- 大日向雅美. (1988). *母性の研究*, 東京: 川島書店
- 大藪 泰・前田忠彦. (1994). 乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因: 4か月児と10か月児の母親の比較. *小児保健研究*, **53**(6), 826-834.
- Rodrigue, J. R., Geffken, G. R., Clark, J. E., Hunt F., & Fishel, P. (1994). Parenting satisfaction and efficacy among caregivers of children with diabetes. *Children's Health Care*, **23**(3), 181-191.

- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64**(6), 409-416.
- 首藤敏元・馬場康弘. (1995). 母親の育児感情と幼児の社会的コンピテンスに関する研究. *埼玉大学紀要: 教育学部(教育科学)*, **44**(1), 53-67.
- Simons, R. L., Beaman, J., Conger, D., & Chao, W. (1993). Childhood experience, conceptions of parenting, and attitudes of spouse as determinants of parental behavior. *Journal of Marriage and the Family*, **55**, 91-106.
- 田中昭夫. (1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. *乳幼児教育学研究*, **6**, 57-64.
- 田中美由紀. (1997). 職務満足感に関する諸要因の検討. *早稲田心理学年報*, **30**(1), 29-36.

< 謝辞 >

本論文をまとめるにあたり、ご指導・ご助言を賜りました文京学院大学 柏木恵子先生、東京学芸大学 岩立京子先生に深く感謝申し上げます。また尺度の使用を快諾してくださいました Akron 大学 Helen K. Cleminshaw 先生、島根大学 田中昭夫先生に厚くお礼申し上げます。さらに、調査にご協力くださいました園の先生方、お母様方に心よりお礼申し上げます。

< 付記 >

本論文は、東京学芸大学大学院教育学研究科に提出した修士論文（2000 年度）を加筆修正したものです。

